

# The Gallery voice NO-72

編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 番地／TEL (098)888-6117 / 2024.7.20  
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa Japan / galleryokinawa.com

## Re-heat and Reborn

### ー沖縄重生ー

胡宮ゆきな

2021年11月、カジマヤーを楽しみに準備していた沖縄の祖母が93歳で亡くなった。

私はコロナ禍の渡航制限、隔離により、現在の制作拠点である台湾から沖縄へ向かう事が出来なかった。最期、お通夜、骨拾い、お葬式。全てをリモートで繋いでデジタル画面越しでのお別れであった。祖母の死の感触に触れる事が出来なかった私は、沖縄の長寿のお祝いカジマヤーを2023年10月21日（旧暦9月7日）祖母のカジマヤーの日に転送することを試みた。



中華圏の宗教儀式や葬儀文化でよく見かけ、欠かせない紙細工「紙紮」（日本語読みはシサツ）の文化を引用して、祖母の為にカジマヤーを執り行った。紙紮とは様々な神の姿を模した紙人形から、お金、故人が好きだった物、住宅や自動車などの生活用品を紙細工によって再現したもので、故人があの世界でも良い日々を送ることが出来るよう願いを込めて燃やし、あの世界へ届ける。沖縄のウチカビのようなものである。コロナ禍では紙製のワクチンを燃やして届ける、といったニュースも台湾では耳にした。そこで私は「カジマヤー」というイベント自体を祖母の元へ「紙紮」文化を通して転送することを思いつく。

かつて、カジマヤーでは盛大なパレードでのお祝いの前日に、模擬葬式と呼ばれる儀礼が行われていたらしい。葬式に見立てた飾り物をつくり、本人に死装束を着させ、手拭をかぶせて身内、親族が泣くという。いくつかの考え方があって、その一つに「死と再生が象徴されている」というものがある。

私は祖母に会いたい。このプロジェクトは最愛の人の死を受け入れる為のものではなく、延命を試みている。死が時間を止めるのではなく、共に老いていく為、生きる為の死者へのカジマヤーである。

まず初めのアイデアは、デジタルの世界であれば祖母とまた会えるかもしれないと考えた。デジタルの世界と死後の世界はなんだか似ている気がする。無温度、無知覚。会いたい人や知りたい事、行きたい場所へも直ぐアクセスする事ができ、神も沢山いる。またカジマヤーパレードを燃やした後を想像する。ウチカビを燃やしてあの世界ではどう受け取っているのか。圧縮された zip データを転送してあの世界で解凍するイメージが思い浮かんだ。紙紮カジマヤーパレードには、祖母の好きな物と事を詰め込んだ。そこには祖母の生きてきた約1世紀の歴史、戦前の沖縄、第二次世界大戦、アメリカ世、本土復帰の歴史、未来への展望と言った歴史の再演から構成された。歴史は現代に生きる私たちと繋がっているが、祖母の死により、私は祖母の生きてきた歴史との繋がりが分断されたように感じた。私は祖母の見てきた世界を長生きさせる為に、熱量を加え、歴史を生き返らせる。

「死ぬのはいつも他人ばかり」と言うマルセル・デュシャンの言葉がある、死は生きている人間だけが知覚する事が出来る。他人の死を認識し、故人とコミュニケーションをとる。死者への想いは、現世に生き続ける私達の為でもある。このプロジェクトはそこから派生して新たな風習として人々に根付く、風習の生まれる過程となる可能性にも期待したい。  
(こみやゆきな/美術家)

## 「私」の物語からはじまる 「新たな風習」の可能性

The Gallery Voice No-72. 2024.7.20 画廊沖繩

### 呉屋淳子

2023年10月、私は読谷村のユンタンザミュージアムで開催されていた、胡宮ゆきなさんの展覧会に足を運んだ。93歳で亡くなった胡宮さん自身の祖母、外間キクさんのカジマヤーをお祝いしたいということから企画された展覧会で、会場には紙で作った色とりどりの花飾や風車、そしてキクさんの得意の大正琴や好きな食べ物を模した飾りなどの紙紮（しきつ＝紙細工による葬儀用品）が展示されていた。展覧会終了後にはパレードが行われ、天国のキクさんに届けるために、最後は台湾の風習にのっとして紙紮の焚き上げが行われた。私はその場にも立ち会うことができた。空に舞い上がる灰と煙を見上げながら、胡宮さんの家族や彼女の友人たちを含む、そこに集まった多くの人たちの優しく温かな表情と晴れやかな笑顔が印象に残った。



今回、胡宮さんは、2024年7月20日から画廊沖繩で「胡宮ゆきな展—沖繩重生—」、8月30日からは那覇文化芸術劇場なは一とにおいて、展覧会「Re-heat and Reborn—風連りてい巡り—胡宮ゆきな展」を開催する。今回の企画の中で、胡宮さんは、キクさんの「カジマヤー」の物語の続きを表現しながら、展覧会を通して「新たな風習の創出の可能性」を模索したいと語る。作品の展示を中心に据えるというよりも、自分自身の表現を誰かが気軽に真似することができるようなパッケージとして提案するという。公開制作やワークショップを今回の企画の中に組み込んだのは、そうした意図があつてのことだろう。

沖繩の風習である「カジマヤー」と、胡宮さんが現在拠点としている台湾・中華圏の葬送儀礼を

結びつけ、新たな「葬い」の形をアートという手法で探求する彼女の試みは、近年、注目を集めている「アートの民俗学的転回」や「ヴァナキュラー・アート」などとも呼ばれる潮流に位置付けられるようにも見える。しかし、それと同時に、胡宮さんの展示は、もっと個人的な、彼女自身と彼女の家族をめぐる「物語」を表現したものでもある。それは、胡宮さん自身のアイデンティティの中にある沖繩の文化、中華圏の文化、そして沖繩の中のアメリカ文化が重なり合う「物語」でもあり、キクさんの紙紮を中心とした展示物のさまざまなモチーフの中に重層的に表現されている。



2023年に台湾で行われた最初の「カジマヤー」の展示の際には、展示物に観客が直接近づいたり、気軽に写真を撮れないように展示空間に仕切りを設けたりしたという。自分自身の家族をめぐる「物語」を表現することは、さまざまな葛藤をとまなうものでもあるだろう。しかし、同時にその「物語」は、家族が生きてきた時代や社会のあり方と不可分なものでもある。だからこそ、家族という親密圏の中で語り継がれてきた「物語」を、胡宮さんは公共の場において多くの人たちと協働しながら表現し、現代社会における人々の「生」のあり方、あるいは「共に生きる」ことの意味を私たちに問いかける。今回の展覧会で試みられる「新たな風習の創出」とは、胡宮さんの家族の「物語」を通して、それを体験する私たちが私たち自身の物語を「自分の言葉で語る」ことの大切さに気づかせてくれるようなものとなるのではないだろうか。（ごやじゅんこ/文化人類学者）



## 沖縄—重生 逝きし人と生きること

### 大城さゆり

台湾を拠点に活動する胡宮ゆきなこみや ゆきなの近作の基軸には、自身の家族史に対する愛情と探求心がある。台湾から沖縄に移住した父方の祖父母、沖縄戦を経験した母方の祖父母、それぞれの歩みを想い、文化が混淆した作品を制作している。

胡宮作品の一つのエポックとなったプロジェクトが2023年の「カジマヤープロジェクト」であろう。胡宮は亡き祖母のキクさんが楽しみにしていた「カジマヤー祝い」のパレードを行い、最後には紙製のパレードカーを焚き上げた。

カジマヤープロジェクトを起点とする今回の展示は沖縄を軸の一つとしながらも、東アジアの近現代史へと広がりを持つ。それは、ごく私的な領域と考えられがちな家族史が、実は沖縄、台湾、中国、そして日本とアメリカの近代史と不可分につながっているためである。作品のモチーフとなっているキクさんの思い出の品や好物を見ても、例えば大正琴、スニッカーズチョコ、台湾土産などごく私的なものの一つ一つが、家族の歩み、移動、そして複雑に変遷する東アジアの統治状況を示唆しているのである。

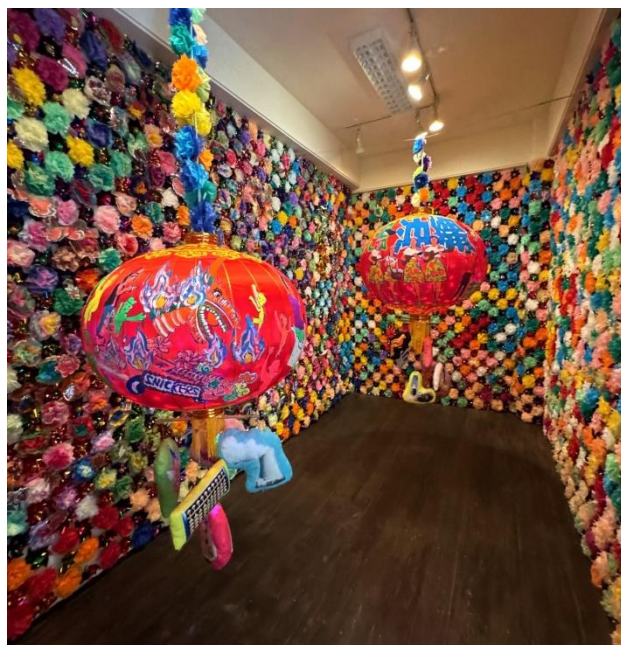
本展のもう一つの重要な要素として、沖縄や中華圏の死生観がある。幾つ年を重ねたとしても、大切な人の死（不在）を受け入れることは本当に難しい。まして、コロナ禍の移動制限によって最愛のキクさんの葬儀・骨拾いの場に直接立ち会えなかった胡宮にとっては、なおさらのことかもしれない。

残された生きし人々が死と向き合うための知恵だろうか。沖縄には清明祭や旧盆で打紙（冥銭）を燃やして、後生（あの世）の親族へ送金する風習がある。その時には「これだけあったら贅沢できるはず」「あれは酒飲みだから全部酒に使わなかねー」などと家族で会話することもあるが、どうも沖縄の死者像は、今もどこか（後生）で生前と変わらぬ生活を営んでいるかのように、生き生きとしている。

胡宮は陶芸を沖縄で学び、そしてプロジェクトの構想段階において、カジマヤーパレードカーのマケット（構想模型）を陶器で制作している。

思えば火によって土が陶器に変化し半永久性を得るように、人も火によって骨となり後生の民に変身するのかもしれない。そして、沖縄では打紙を焚いて後生へ生活資金を送り、中華圏では亡き人の好きな物品に精巧に似せた紙細工（紙紮）を焚き上げて送る。胡宮はキクさんが楽しみにしていた祝い行事そのものを後生へ届けた。孫や家族、そして作品を支える多くの人の手による渾身のカジマヤーを受け取ったキクさんは、後生の仲間たちにさぞや羨ましがられたことだろう。

こうした本展を含む胡宮のプロジェクトは、中華圏や沖縄の文化の奥深さを再認識させると同時に、胡宮の作品世界が今後ますます壮大に展開していくことを確信させる。地域性、時間軸、そして自と他などの繋がりを複雑に混淆させることで一見派手で大胆に見える胡宮の作品は、その一方で繊細に作りこまれたモチーフの語りによって、観る人が人生を重ね合わせて共感呼び起こす温かみも持っている。



過ぎ去ったと思われがちな歴史も逝きし人も、胡宮ワールドでは、今も私たちのすぐ隣で、生き生きと呼吸を続けている。

（おおしろさゆり/沖縄県立博物館・美術館学芸員）



## エアーパーン に込める風

田原美野

2020年コロナパンデミックの中、画廊沖縄で開催した「キメラオキナワ 異質同体」以降、胡宮ゆきなへの活躍はめざましい。作品に用いる素材や作品化へのプロセス、その表現方法は、広がりを持ち始めクルクルと、かざぐるまの様に周囲を巻き込んでいる。

2021年の展覧会「琉球の横顔—描かれた『私』からの出発」(沖縄県立博物館・美術館)では、鳩の嘴と銃口が向かい合わせで融合した巨大な黄色のバルーン「It' a peace of cake 10XL」(邦題: 平和なんて朝飯前)を発表した。モチーフとなっているのは、屋台文化が浸透する台湾の夜市で売られている、鶏蛋糕とよばれるお菓子である。鳩や銃、バイクや象など、子どもが喜びそうな様々なアイテムが型取られ、注文すると店の人がランダムに袋の中に入れて手渡される。自らではアイテムを「選べない」という不自由で満たされた袋の中身が、胡宮には世界の混沌とした状況や沖縄のありように映った。

さらに胡宮の作家としての始まりが、「焼成」という過程を抜きには語れない陶芸から出発していることも、注目に値する。胡宮は作品を頻繁にくっつける。キメラオキナワのシーサーシリーズでは、個体として成立しているシーサー二体をカットし、その不完全な状態のシーサーを再び焼成し、くっつけた。見慣れないそのシーサーは、どこか痛々しくもみえる。盛んに「多様性」が叫ばれ

る昨今の社会において、それを享受することが、決して無痛ではいられないことを、視覚的かつ身体的に感じるのである。バルーン作品「兎龍」も、文字通り「兎」と「龍」がくっついた作品である。LEDライトが血液のように体内を巡り、まるで一体の生き物のようだ。この作品は、8月30日からスタートする胡宮ゆきな展(那覇文化芸術劇場などは一と開催)で展示される予定である。

最新作「OKINAWA 10XL」は、「戦争」や「暴力」がテーマとなっているバルーンシリーズの延長線上にある。1945年沖縄戦時下でアメリカ軍によって撮影された弾丸を受ける富盛の石彫大獅子の写真をもとに、現代の兵士が加わった構成のバルーンは、この沖縄の地では異様なリアリティを放つ。その土地の空気を吸い込み、出現する場所や見る者の立ち位置により、真っ白いバルーンは色づく。胡宮の尽きることのないアイデアと行動力が、新たな風を起こしていく。

(たはらみの/画廊沖縄ディレクター)



2024年5月 台湾のアトリエにて

## 【胡宮ゆきな略歴】

- 1987年 沖縄生まれ
- 2012年 沖縄県立芸術大学大学院造形芸術研究科陶磁器専修了
- 2013年 胡宮ゆきな展「談談笑笑」(画廊沖縄)
- 2015年 個展「入睡前的細語 Dreams before sleep」(新北市立鶯歌陶瓷博物館・台湾)
- 2020年 胡宮ゆきな展「キメラオキナワ 異質同体」(画廊沖縄)
- 2021年 「琉球の横顔—描かれた『私』からの出発」(沖縄県立博物館・美術館)
- 2021年 個展「平安平安平」(台南文化センター・台湾)
- 2023年 臺南新藝獎「匯聚的分岔點 Bifurcation of confluence」(大新美術館・台湾)
- 2023年 馬祖國際藝術島 馬祖ビエンナーレ(馬祖島南竿・台湾)
- 2024年 「南巷藝事 Art Lane Tainan」(陳德聚堂・台湾)
- 2024年 胡宮ゆきな展— 沖縄再生— (画廊沖縄)